

平成30年度国立大雪青少年交流の家第1回施設業務運営委員会事業部会議事要旨

日時：平成30年6月26日（火）15：00～16：00

場所：国立大雪青少年交流の家 音楽談話室

運営委員出席者：佐藤委員、川村委員、小野委員、中澤委員、坂下委員、栗原委員

計6名

大雪青少年交流の家（事務局）

出席者：中田次長、国枝主任企画指導専門職、石川企画指導専門職付、高橋事業推進係員

計4名

（●事務局 ○委員）

- 開会。会議時間、資料確認、施設業務運営委員及び事業部会担当職員の自己紹介、平成30年度事業説明。
- 本部会の役割は、事業の計画・評価について協議することと、効率的な事業の運営について御意見いただくことです。部会には、道新さんやNHKさんもいらっしゃるのので、我々の広報の仕方が良いものなのかや、目標である年間稼働率50パーセントを切らないよう、また事業参加者による宿泊者の確保と教育的効果を高めたいと考えております。そしてそのためにはやはり広報が重要だと考えています。  
評価については、数字として表れてくる部分やその他の要素（参加者の達成感の高さ、その後の活動や施設の利用（類似事業への参加）につながった等）について部会の中で揉んでいただき、最終的な総合評価として承認していただきたいと思っております。  
それでは皆さんの意見を聞かせていただきたいと思っております。
- 自然の遊び場作りについて、それはこれから進めていくのか？
- これから趣旨に賛同する方を広く呼び掛けていくが、まずは、青葉幼稚園の「おやじの会」という父親の団体と連携して進めていく予定。8月くらいまでには着工予定である。
- 場所は？
- 交流の家の敷地内で考えている。現在の幼稚園の教育要領が改定されて、幼少期の自然体験が重要視された。そこで子供が自由に安心して遊べる場所を大人が作ろう、という発想のもと行っていく。

- 対象はどのような人になるのか？
- 親子事業の参加者、日帰りの利用者などを考えている。

どういったものを作るのかについては、こちらで提示するのではなく賛同者と一緒に考えていく。そのため、まだ設計図などもなく、長いスパンで、子供たちが遊びながら「こんなものが欲しいよね」という希望から、どんどん増やしていく方法が望ましいと思っている。
- 現在の交流の家の利用状況としては未就学児団体の利用の割合はそこまで多くない。そこで「こういうもの（自然の遊び場）ができました」という広報ができれば、そういった幼児団体の利用増進も見込めると考えている。まずは事業での利用を考えている。
- 体験活動はできるだけ幼少期から始めるのが好ましいという研究がされている。そこで我々も様々な事業を計画し、実施している。昨年では「食」にまつわるものが特に好評を得ている。今年については登山などを計画しているが、正直どのような体験が参加者親子のニーズに当てはまっているのかは、手探りで探っている状態である。
- 以前東京に住んでいたが、遊ぶところが全然ないため、毎週片道1時間かけてNPO法人の持っている山で遊び活動をしていた。そこでは「たき火」も解禁されており、子供だけでなく親も一緒にものすごく楽しんでいた記憶がある。
- 最初は大仰なものを大人も作ってくださるだろうが、子供たちはきっと大人が予想していたものとは違うもので遊ぶ気がする。しかし子どもの自由な遊びを促すうえでは、そういった「無駄」こそ大事にしていかななくてはいけないのかな、と思っている。

我々の施設はもともと「青年の家」として活動を行っていたため、未就学児に対してのノウハウが不足している。そのためそういった知識を蓄積させるためにも、今回の事業を大事にしていきたい。

今回の部会でも、最近の子供はこういったことが流行っているといった、トレンドをお話ししていただきたい。例えば農作業体験なんかは評判もよさそうだとか、そういったアイデアもいただけたらと思っている。
- 事業のPRについて、交流の家の皆さんが大変な熱意をもってすべての事業を行っていることはよくわかった。報道としては具体的な日程を教えていただきたい。ただその全てを報道はできないため、簡単に言えば「新しいもの」「珍しいもの」そういったいわゆるネタになるものを絞って具体的に我々に投げ込んでもらいたい。

炊事場ができるという話もあったが、そういった新しいものが「いつ」「どこで」「どれ

くらい」できるのかが知りたい。

- 炊事場について、場所は決まっています、具体的にどうしようかと話を進めている。米を炊くにしてもただの飯盒ではなく「羽釜」にしようとか、そういった細かな部分を決めていく。そうなってくると薪が必要になり、さらに薪をどうやって継続して入手していくかという課題も出てきている。
- 廃材といえば東京の NPO の山でのことだが、廃材と釘と金づちなんかあれば子どもは「何か」を作りはじめる。何を目的にしているのかわからないし、完成もしない、だが完成しないから来週もまた行く！ という風になる。それがすごく楽しそうだし、大人も楽しい。だから、そういった場所が近くにできるって、すごく良いことだと思う。
- 私は今年、十勝岳の山開き登山に参加したが、そこで晴れていたら山の地形や泥流の流れの跡なんかも見るつもりだった（見えなかったが）。ジオパークの関係もあるため、そういったことを看板事業の中に入れていったらどうか？
- まさにジオとは連携して事業を行っているところである。
- 今回も町のジオパーク担当者と連携して事業を実施していく予定だったが、今回は火山の活発化にともない、事業対象が初心者であったこともあり、断念した。
- 直近では7/7-8に予定している親子登山でも、ジオと連携して子どもたちの学習にもつながるような事業に展開していきたいとは思っている。もうすでに100人近い申し込みをいただいている。
- 50本の事業を行うことは施設の職員にもかなり負担をかけているが、十勝岳という山を抱える以上、その自然を丁寧に扱っていかなくてはこの施設がある意味がなくなってしまうと思っている。
- 小野さんいかがですか？ 山の事業について何かご意見などは？
- 山に絡んでくるとしたら、登山者の体力などの段階ごとに分けて行うことが必要になってくる。  
それとは別にプールはうまく使えないか？

- プールについては昨年「サップ」や「カヌー」など新しい事業などにも取り組んでいるが、講師が遠方ということもあり、回数は多く行うことができていないことが現状である。
- 我々のところではジュニア対象で1泊2日の事業を行っているが、廃校になった中学校を利用して行っており、そこにはクライミングの道具なんかもあるが、なかなか集まりが厳しい。ただ中学生なんかはクライミングにすごく興味を持っている。  
この施設（大雪）にクライミングの壁なんかは作れないだろうか？
- プールについては有効に活用していきたいとは思っているが、維持費（年間600万円）を鑑みても、存続するべきか否か判断しなくてはいけない状態ではある。美瑛町のプール建設を機に早急に決めなくてはいけないとは思っている。  
ボルダリングもいいが、費用の話ですれば、本施設は50年という年月を経ていることもあり、まず修理しなくてはいけない個所が多い。そこも頭を抱えているところである。
- ボルダリングはネイパル深川にあり、子どもを連れてたまに行くが、楽しそうに登っている。
- 深川のボルダリングの壁は高くしすぎたという反省点がある。
- 高校の先生で自宅に手作りのボルダリングの壁をもっている人がいる。お金をかけなくてもそういったものは作れるのかもしれない。
- 合板のボードで作ることは可能。高さは低めでも横に広げていけば、十分に満足のものができるはずだ。
- ボルダリングはオリンピックの種目にもなっていることから、これからますます人気が出るのが予想される。
- 公共のものでいえばネイパル深川にある。すごく高いやつが10メートル以上ある
- あそこは壁を高くしすぎたせいで専門のインストラクターが付かないといけない、しかし、もし当施設に作るなら、レベルに合わせた高さを複数用意することで、さまざまな子どもたちが遊ぶことができるようになる。

- カムイの森にもある
- 作るなら室内に作る方がいいのでは？ そしたら冬場にも利用できる
- ボルダリングであれば競技のトップ選手が北海道にいる、男女各1人ずつ呼ぶことはできる。
- ぜひ機会があれば協力いただきたい  
「食」のプログラムについては農協さんにも協力いただき、事業としても大変好評をいただいているため、今後もぜひ連携を深めていければと思っている。親子事業では、ラブニールのピザ作りの方を講師に実施している。もし農協さん側からも「こんなことができるよ！」というふうに御提案などいただければと考えている。
- 「食」のプログラムは非常に満足度が高い。たとえ上手くいかなくても最終的な満足度や達成感は得られているとの回答をいただいている。
- 薪について、台風などで倒れている木が多くあるのは事実のため、運び出す手間を施設側で考えてもらえれば、ほぼ無料に近い形で提供できると思う。というのも、木材価格から木を運び出す労賃を差し引くと、販売価格は限りなく0円になる。そのため寄付という特殊な形をとらなくても、かなり安価になる。
- 最初にお話した「遊び場作り」なんかでもぜひ木材を活用したいと思ってひるため、今後詳しいお話しをさせていただきたい。
- こういった事業に応募される方はおおむね道内の方なのか？
- おおむね道内の方である。長期キャンプには名古屋から来きた参加者もいたが、道内からの参加者がほとんどである。
- こういった冬のプログラムは道外にはないから、本州からも応募があると思っていた。冬場の稼働率はやはり落ちるのか？
- 冬場の稼働率は確かに落ちるが、クロスカントリーの団体が多く利用しているため、そこまでの落ち込みはない。

- 1年間で最も落ち込むのは9月と10月。まさに閑古鳥が鳴いている状態である。逆にその期間に利用いただける団体を見つけられれば、年間を通して一定の稼働率を見込めるのだが。
- すみませんが、そろそろ時間が来てしましまして、皆さんいかがですか？ 何か最後にありませんか？ 栗原委員よろしいですか？
- うちも年間を通していろいろな事業を展開しているが、50本というのはやはりすごい数である。そういった事業を行うにあたって、私は「職員も楽しむ」ということを意識している。自分たちが楽しいことをやれば、参加者も楽しめると思っている。もしそれであまり集客ができなかったとしたら、来年はその事業を改善していき、そういった改善を重ねていければ自ずと良い事業がどんどんできていくのかなと思っている。
- それでは時間も来てしまいましたので、ここらで部会を閉じさせていただきたいと思います。ありがとうございました。